「敬意表現」研究の意義と方法

坂本　　恵

【キーワード】 国語審議会　敬意表現　丁寧　配慮　「自分」

0　はじめに

2000年12月第22期国語審議会によって「現代社会における敬意表現」が答申された。「敬意表現」は，「言葉遣い特に敬語」に関わることとして新しく考え出された概念である。

「敬意表現」とは，「コミュニケーションにおいて，相互尊重の精神に基づき，相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し，敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである」と定義されている。※1

「敬意表現」については，その精神と概要は示されたものの，具体的な形やその詳細についてのすべてが明らかにされているわけではない。多くは今後の研究の進展に期待することになるわけだが，この答申作成に関わった者の一人として，「敬意表現」の意義，並びに，今後の研究の方向について考えてみたい。

1　「敬意表現」研究の必要性

「敬意表現」は「敬語」に代わるものとして提案された。「敬語」は，日本語の一つの大きな特色であり，日本の文化として守るべきものだと考えられる一方，人間の上下関係を固定し，封建的で自由な表現を妨げるものであるという批判も根強いものである。そこで，「敬語」の持つ好ましい精神を生かし，悪い点を排除した姿というものを提案することにより，「敬語」を後世に受け継いでいけるものにしたい，という考えから提案されたのが「敬意表現」である。つまり，「敬意表現」は，本来，好ましく推奨すべき言葉遣いとは何か，という問いにこたえるものとして提案されたわけであり，「敬語」を広く捉え，その好ましい点を広げ，批判されるような方向は排除した，いわば「望ましい言葉遣い」だと言えるようなものなのである。ただし，ここで示されたのはそうした言葉遣いへの方向性であって，具体的なものが明示されているわけではなく，それを守りさえすればよいという「お手本としての表現集」を提示することは避けられた。具体的な語や表現をあえて提示せず，「敬意表現」の輪郭を示すいくつかの例を通して，その方

向性について考えてもらうという方針を取ったのである。必要なのは，いつでも使える便利なお手本となるべき言葉を覚えることではなく，一人一人が考え，習熟していく過程において言葉を磨いていくということである。いくら具体例を列挙してみても，すべての例を手本として示すことはできない。

そこで，具体的な「敬意表現」の姿を明らかにしていくことは，今後の研究者の課題であるとも言える。言語研究者は，現にある，所与のものとしての言語を観察し，分析することが仕事であると言えるが，一方では，好ましい言語の姿を提案することも一つの役割ではないかと考える。少なくとも，どのような可能性があるかを記述することは必要であろう。それは，言語教育への応用にも関係することである。「敬語」にとどまらない，場面に応じた様々な言葉遣いに関する教育は，国語教育，日本語教育においても，その必要性が認識されてきているものの，必ずしも有効な方法が示されていないのが現状であろう。教育面に貢献するためにも，望ましい言葉遣いとしての「敬意表現」の本質を明らかにする必要があると考える。

2 「敬意表現」研究の意義

研究面においては，「敬語研究」はかなり以前から「狭義の敬語」に留まらず，「待遇表現」としての研究が進められている。狭義の敬語を考えるだけでは十分でないことは，大方の合意を得ていると言える。「待遇表現」としての研究では，「敬語」に象徴される「プラス方向」の面のみならず，敬語が用いられない「普通の状態」，そして，「マイナス方向」の面も含めた研究が進められている。

しかし，「敬語」によって表される「プラス」の方向，日本語では「丁寧さ」と言えるものの正体は，十分に明らかになっているとは言い難い。「丁寧さ」とは何か，どのようにすれば「丁寧」になるのか，何が欠けると「丁寧」にはならないのか，といったことの研究は必ずしも十分ではなかったように思う。「ポライトネス」は，そうした面に焦点を絞った研究であるが，日本語を対象とした，日本語そのものに即した，「ポライトネス」・「丁寧さ」の研究はまだ途上である。「相手や場に応じた言葉遣い」が，どのような場合に好ましい「敬意表現」になるのかということを考える上でも，日本語での「ポライトネス」・「丁寧さ」とは何か，「相手」や「場」とは何か，「敬語」以外の「敬意表現」を形作るべき言葉や言葉遣いとは何か，といったことを明らかにしていかなければならない。「敬意表現」研究はそこから始まると思う。

「敬意表現」という捉え方は，「敬語」に比べてあまりにも範囲が広く，「敬意表現」と考えられる例をあげていくと膨大なものになり，収拾がつかなくなってしまうのではないかという批判もある。適切な「敬意表現」を具体例でしか表すことができないとすれば，そう言えるかもしれない。しかし，適切かどうかの最終的な判断はその場における個人によって異なるものであるかもしれないが，ある

程度の客観的な記述はできると思う。「丁寧さ」の原則，「相手」や「場」の記述，どのような言葉遣いが「敬意表現」に相当するのか，などといった点については，考察，分析した上で，それらを適切な用語で整理することは可能であろう。また，どのようにして「丁寧さ」が実現され，それがどのような「相手」と「場」に応じたものになっているかを判断する基準なども，何らかの整理のもとに記述することができるようになると思う。それを明らかにすることは，大きく言えば，研究者の使命ではないかと考える。研究者には，そうしたことこそが求められていると言えるのではないだろうか。

「敬意表現」の本質は，形式にではなく，精神にある。「相手」や「他者」を尊重すること，それだけではなく「自分」をも「尊重」すること，そうした「敬意」に基づいた言葉遣いが望ましいものであるということを提唱しているのである。しかし，これは決して精神論に傾いているということではない。「言語」は客観的科学的に分析されるべきものであり，「気持ち」や「精神」とは切り離して考えるべきものだと考える向きもあるかもしれないが，現実の様々な表現や言葉遣いを考えるとき，「表現主体」の気持ちや精神を完全に切り離したものとして扱うことができるのだろうか。それを明確に記述することは困難かもしれないが，そうした「表現主体」の認識の仕方，何を「好ましい表現」として捉え，何を「好ましくない表現」だと捉えるのかなどについて考えることは必要であると思う。

敬語が批判される大きな理由として，形式をのみ重視すればよいのか，形さえ整えばいいと言えるのか，といったものが多く見られる。よく言う「慇懃無礼」や，商業場面などでの気持ちのこもらない形だけの表現が批判の対象になっているのを見ても，そのことはよくわかる。そうした批判を乗り越えるためには，まず，「気持ち」を持つことが重要視されるのである。しかし，次に重要になるのは，「気持ち」さえあればよいと言うのではなく，どのようにすればその「気持ち」を表すことができるのかという点である。「気持ち」をどのように表すのか，「気持ち」のこもらない表現がどのようなものであるのかといったことなども，客観的に記述できるようになっていなければならないだろう。

「敬意表現」は，「相手」や「場」に適切に配慮したものがよいということなのであり，その意味から，「敬意表現」は「配慮表現」であるという意見もある。しかし「配慮」という用語が選ばれず，「敬意」が選ばれたという理由は，「配慮」というだけでは十分ではなく，なぜ「配慮」するのかといったことが重要であり，その「配慮」の根底にあるものこそが「敬意」なのだということからである。「相手」に対する「敬意」に基づいて，「相手」の立場，置かれた状況に「配慮」をするのである。「相手」を「尊重」するからこそ，「相手」に「配慮」することが大切になるのである。そしてさらに言えば，「配慮」するのは「相手」だけではない。「自分」自身に対する「配慮」，「自分」自身に対する「尊重」にも基づいたものとしても「敬意表現」は考えられている。「敬意表現」とは，「相手」・「他者」と「自

分」との「相互尊重」に基づくものだということがその基本にあるわけである。

「相手」と「自分」自身との相互尊重があるとき，それに基づいた様々な「気持ち」を「相手」や「場」に応じた言葉遣いとして表すわけである。いくつもある表現の中から適切なものを選択し，使い分けることが求められているのである。ただ単に，形式を整えるだけでもなく，配慮するだけでもなく，まず「気持ち」を持った上で，それを適切に表現することが大切になるわけである。その「気持ち」がどのようにして適切に表されるのかを客観的に示すことが，研究者としての仕事となると言えるだろう。

3 「配慮」と「丁寧」

それでは，「敬意表現」を研究するためには，具体的に何をどのように研究していけばよいのだろうか。「敬意表現」は「相手」や「場」に配慮して使い分けたもので，「好ましいもの」と言うことになるが，何が好ましいのかということを考えるためには，ある表現がどのような性質を持ったものであるのか，そしてその場合の「相手」や「場」などがどのように考えられるのかが客観的に示されなければならないだろう。その表現が好ましいものであるかどうかについては，最終的には表現する者，表現を受ける者，一人一人の判断によるが，多くの人が賛同できるような規準は示される必要がある。

「敬意表現」として好ましいという規準を表す言葉を考えると，一つは「配慮」であろう。また，「丁寧」という概念もある。表現の「相手」，「場」，「内容」などをどのように認識し，その認識をどのように言葉の上に表したときに，「配慮」したといえるのか，また「丁寧」であると言えるのか。この認識の仕方とそれを言葉に表すシステムが「敬意表現」であると言える。そのシステムを客観的に示すことが重要である。

まず，「配慮」「丁寧」がどのようなときに現れるのかを考えてみたい。

「場」の認識というのは，その場が「改まっているか」「くだけているか」という認識であると言え，「改まっている」ことをプラスの方向と考えることができる。そして，「改まっている」ことを示すために，丁重語や「本日」などのかたい語彙などを使うなどということになる。丁重語などの語彙を使うか使わないかで，「改まっている」かどうかを表すわけである。そして，「場」について「丁寧にする」というのは，この，「改まっている」というプラスの方向を表しているものと言える。それに対して，「場」に対する「配慮」は，必ずしも「改まり」の方向だけではなく，状況に応じて「くだけ」の方向を意識するという「配慮」もあり得る。ジョークを言って「場」を和ませることも「配慮」の一つであると言えるだろう。

「相手」の認識は，「相手」の位置づけに関する固定的な認識と，その場での相手の状況や話している内容にも関係する相手の行動についての考え方，すなわ

ち，その場限りの臨時的な認識との二つがあると言える。

「相手」の固定的な位置づけは，一般的にその「相手」を「高める」のかどうかという形で現れる。「相手」を高めるときには，「おっしゃる」「なさる」などの「直接尊重語」や「申し上げる」「伺う」などの「間接尊重語」を使うことで表すことができる。日本語の敬語はこの方面で発達しており，「丁寧」とは「(直接・間接）尊重語」などを使った「高め」の方向を表すものだと考えられる。また，「相手」に対するプラスの方向は，「尊重語」だけではなく，「です・ます」などの「丁寧文体語」を用いて表すこともできる。多くの場合，「相手」を高めるためには，「おっしゃいます」などというように「尊重語」＋「丁寧文体語」で表すことになる。※2

しかし，相手の認識は「高める」か否かといった一義的な基準ではなく，「親しい」か「親しくないか」という方向も考えられる。この場合，「敬遠」という言葉からもわかるように，上下方向の位置づけで考えると，上方向は「遠い」，つまり「親しくない」という方向で示される。したがって，「親しくない」ことがプラスの方向だと考えられる。ただし，「親しさ」というのは一つの価値であり，その観点で考えれば「親しくない」ことはマイナスであるとも言える。「相手に配慮する」といった場合，自分より上に扱うことは一つの配慮であると言えるが，また一方では，親しさを見せるということも一つの配慮であると言える。この二つの価値観は相反するものであるため，扱いが難しいということになる。一般的には，「相手」に対する配慮としての「丁寧」は，上下関係での上扱い，プラス方向を意味すると考えてよいだろう。「親しさ」を表す場合，そのような意味での「丁寧」の概念とは違ったものになる。「親しさ」を表すには，「丁寧」とは違った考え方を導入しなければならないだろう。「配慮」ということで考えれば，「親しさ」を表すことは配慮に他ならない。そのため，ここで，「丁寧さ」と「配慮」が異なるものとして考えられるわけである。

次に，「相手」の臨時的な状況に関する認識を考えると，それはたとえば，相手の状況を見て，忙しそうであったらその状況を考え，「お忙しいところを」などと言葉を添えたり，依頼する用件が相手にとって負担の大きいものであったら，前置きをしたり，理由を言ったりすることが「丁寧」であると考えられる。また，日常的な挨拶などで相手との関係を保つことも「丁寧」であると考えられている。これらは，敬語とは異なった，挨拶や決まり文句を使うことによって表されるもので，使った場合がプラス方向，「丁寧」であると言える。また，たとえば，相手の行動を自分に対する恩恵と捉えることもやはり「丁寧」であると考えられ，敬語動詞を含む授受表現で表すことができる。「相手」が「なさった」と言うだけか，「していただいた」「してくださった」と言うかという違いであり，授受表現を加えることがプラス方向，「丁寧」であると言える。また，「ありがとう」などお礼を言うことで自分に対する恩恵を表すことができる。日本語で実際に感謝するべ

き時以外でも「ありがとう」が多用されるのはこの理由による。感謝を表すことが「丁寧」と考えられるのである。

この他に，「丁寧」と考えられることには，たとえば，何かを依頼するときに，その内容によっては前置きや依頼の予告，理由を述べるなどして流れを作ることなどもある。※3 一般的に短い展開より長い展開の方が「丁寧」であると考えられる。これは今までのような，単語や文を加えるかどうかということより幾分複雑な動きであり，段階的に丁寧さを表していくことができる方法である。また，筆者グループが以前に発表したように，「来ませんか」の代わりに「来てもらえますか」を使うことなど「誘い」の意図を持っているときにそれを「依頼」の形で表すといった，「あたかも表現」（この場合は，「あたかも依頼表現」）を使った「行動展開表現」に関する「「丁寧さ」の原理」もある。※4 これは，原則的に，「相手」に「決定権」を与え，「自分」が「利益」を受けることを表すような表現にすることが「丁寧さ」を表すことになるという考え方である。これは「相手」と「自分」の関係や，話している内容，その用件の重さなどによって「丁寧」にするかどうかが決まると言った性質のものであるが，そのほかの決まり文句などを言う場合の原理にもなっている。たとえば，自分の判断を押しつけないで「おいしいかどうかわからないけど」「よろしかったら」などと言うことは相手に「決定権」を預けることになり，「食べていただけると」「言ってくださったので」などと授受表現を使うことは，自分にとっての「利益」や「恩恵」を表すことにつながるわけである。

以上のように，「丁寧」にするということは，「敬語」や「挨拶」や「決まり文句」などを使うことで，「場」を改まったものとしたり，「相手」を高めたり，「相手」に「決定権」を与えたり，「自分」が「利益」を受けるように表現することなどであり，それは専らプラスの方向として考えることができるものである。それに対し，「配慮」は，必ずしもプラスだけではなく，「おまえのためにやってやるよ」などと，「相手」を低くする，つまりマイナス方向で「親しさ」を表すことなどもある。また，「おいしいかどうかわからないけど，よかったらどうぞ」と相手に「決定権」を預ける「丁寧さ」より，「これすごくおいしかったから，食べてよ」と言い切ることである種の「配慮」を表すこともできると言えよう。このように「配慮」というのは，「丁寧」すぎることに対する反発や，「慇懃無礼」という言葉があることでもわかるように，「丁寧」にすればよいというものではなく，「丁寧さ」を含めて，それが適切であるようにしたものであると言えよう。

この，「丁寧」と「配慮」の表し方のモデルがあり，それを表す具体的な表現が示されていれば，ある具体的な場面でのある具体的な表現がどのようなものかが記述できることになる。そこではじめて，それが好ましいものであるかどうかが客観的に判断できると言うことになるわけである。

4 「自分」という観点

ここまでは，「相手」，「場」などに対する配慮を考えてきた。しかし，「相手」の位置づけはあくまでも相対的なもので，相手が単独に位置づけられるといった性質のものではない。「絶対敬語」ではなく，「相対敬語」であると言われる所以である。「相手」を位置づけるということは，同時に「自分」をどう位置づけるのか，「自分」をどう表したいのか，という意味合いもあるということを忘れてはならない。「敬語」に含めて考えられることもある「人称詞」は，「相手」を表すものと「自分」を表すものとの両方があり，ある意味では常に相対的な一対として考えられるものである。

また，「御社」「玉稿」などといった「相手尊重語」と，「弊社」「拙稿」などといった「自己卑下語」とは，「相手」と「自分」とを峻別する重要な要素である。

このほかに，「おっしゃる」「申し上げる」などの「尊重語」系や，「くださる」，「いただく」などの「授受表現」によって，「相手」と「自分」とを区別することは重要なことである。「相手」があるとき，常に「自分」があるのである。

もちろん，「相手」に対して「丁寧」にするという場合，「自分」を低めたり小さなものとして表したりすることが求められてはいるが，それは当然自分自身をそのように認識しているからそう表すのではなく，そのように表すことが相手に対する配慮となるからそのようにしているのである。

しかし，それとは別に，「自分」をどのように表現するかという観点もある。自称で考えると，「わたし」であるか「わたくし」であるか，男性であれば，「わたし」であるか「ぼく」であるか「おれ」とするか，ということは，相手によることもあるが，自分をどう表現したいか，自分はどのような人間であると相手に示したいかということを示していると言えるのである。同様に，美化語を使うかどうかということも，相手に対する配慮であると同時に，自分自身をどう表すかということと関わっている。よく話題になる，相手に対して「いらっしゃる？」などと問いかけることも，相手に対してというより，自分自身の表し方に関係していると言えるのではないか。自分自身をそのようなきれいな言葉遣いをする者として表したいということになろう。自分自身がどのような人間であるのかをどのように示すかということは，相手に対する配慮の裏返しとして，同時に存在する意識であると考えられる。

このことは，これまでにもいろいろなところで述べてきた[※5]ように，相手に配慮しつつ，自分の意見，考えを伝えるということも「敬意表現」の一つの役割であるということと関係がある。「敬語」「配慮」というと，「相手」や「他者」など，自分ではない外側のだれかに対するものだと考えられがちだが，それだけにとどまらず，「自分」の表現，「自分」自身への配慮という観点を打ち出したのが「敬意表現」であると言えよう。自分自身をどう表すかという観点である。また，ある意味では，言語活動は，まず，「自分」が何をしたいのか，何を表現したいのか

ということから始まると言える。それをいかに効果的に表現するかという観点から発達したのが「敬語」であり，「敬意表現」であるとも言えよう。「配慮」する「丁寧」にするという時，あくまでも「自分」に何らかの「意図」があり，それを実現させるためにいろいろなことに「配慮」しなければならないということなのである。「自分」が「何をしたいのか」，「何が言いたいのか」ということから全ては出発すると言っても過言ではない。自分がしたいことのために，それを実現するために必要だと思うからこそ，「配慮」するのである。「何がしたいのか」「何が言いたいのか」という「表現意図」の観点は何より大切だとも言える。この「表現意図」を叶えるための表現という観点からの研究が「敬意表現」の研究でも重要になるということである。

5 「敬意表現」研究の方法

「敬意表現」を研究するということは，まず，何が「丁寧」であり，「配慮」であるかということを明らかにすることであり，そのために，我々の日常の言語生活をこの観点により分析することである。

我々の言語生活を考えてみると，次のような流れで行っていると考えられる。まず，何が言いたいのか，自分をどう表したいのかということを考える。そして，次にそれをどのように表現するのかを考える。その場合，相手や場，その場の状況といった自分を取り巻く環境をどのように認識するか，そして，その認識に基づいてどのように表現することがもっとも効果的であるかを考え，表現する。我々はこのような流れで表現していると言えよう。「敬意表現」とは，この流れによる表現で「相手」や「場」といった自分を取り巻く環境にもっとも適している，好ましいものであるものを言うわけである。相互尊重に基づく「好ましい表現」が何であるかを特定するのは難しいことではあるが，客観的に記述されたある場合の言語行動について，ある基準，物差しを用いてその程度をはかり，論述することはできるだろう。

つまり，まず必要なのは，ある言語行動について，客観的に記述すること，それを客観的な共通の基準によって評価することである。この客観的な基準が「丁寧さ」であり，「配慮」であると言える。それらをもう少し具体的に言うと，「高め」や「改まり」などということになるわけである。

「丁寧」，「配慮」ということについて，ここでは一例としてのモデルを示したが，こうしたこともさらに検討しなければならない。言語行動の記述の仕方，それをはかる基準についてなど，一つ一つを検証し，多くの人が合意できるものを作っていかなければならない。それが，これからの研究の方向になっていくだろう。そうしたことの積み重ねによって，「敬意表現」の具体的な全体像が明らかになり，教育面などへの応用も可能になると思われる。「敬意表現」の本格的な研究は，まさに今始まったばかりなのである。

※1　国語審議会答申「現代における敬意表現」による
※2，3，4　蒲谷宏・川口義一・坂本惠（1998）『敬語表現』（大修館書店）を参照。
※5　坂本惠（2001）「敬語と敬意表現」『日本語学』4月号（明治書院）などを参照。